

## 強制連行・被爆体験から韓日の架け橋に

キム ジョング  
金鐘基

### 兄の死と日本

私は、一九二七年に韓国 忠清南道 唐津郡チュンチョンナムド タンジングンの農家の次男として生まれました。進学など考えられなかった時代です。私は普通学校を卒業すると、家の農業を手伝うようになりました。

五歳上に兄が一人いましたが、戦時中、二十歳になるかならないかで日本に強制連行されました。そして北海道の炭坑で働かされていた時に事故に遭い、家は遺骨となって帰ってきました。

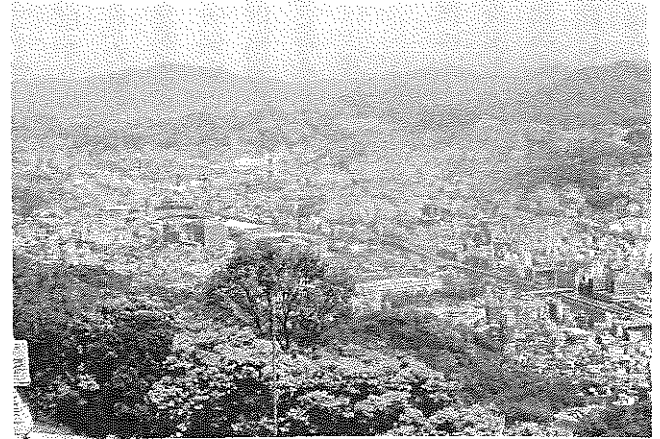
### 強制連行と苛酷な労働

一九四五年一月のある日のことです。面（日本でいう村）事務所の役人と日本人らしき警察官姿の男に声をかけられ、手首をひもで縛られてトラックに乗せられました。強制連行です。徴用令状のようなものがあつたわけではありません。若い者を見つけたら片っ端から連れて行くといった感じでした。後から聞いたところでは、同じ面の徴用予定者が逃亡し、その穴埋めに私を引っ張っていったのだそうです。

行き先不明のまま、わずかな握り飯だけをあてがわれ、窓もない貨車に押し込まれました。その貨車には真つ暗な中、同じような境遇の若者がぎっしり詰め込まれていました。そのまま釜山まで運ばれ、そこで船に乗り換えて博多へ。そこから汽車に乗せられ、最後に長崎三菱兵器工場にたどり着きました。長崎が目的地だったとわかったのは、工場内の飯場に着いてからでした。

それから毎日、大橋と住吉を結ぶトンネル（住吉トンネル）を掘られました。そのころはもうすでにかなり空襲が激しくなっていたので、兵器工場の製造設備を地下に移すために、堅い岩盤に四百メートルのトンネルを掘ろうというのです。そこでは五十〜六十人の韓国人が、昼夜二交替で働かされていました。日本人は五十歳ぐらいの監督だけでしたが、彼も少しして出征してしまいました。

夜明け前に飯場を出て、日暮れに戻る生活。仕事は厳しく、休日ありません。もちろん賃金などもらえません。現場には罵声が飛び交い、殴られることも日常



稲佐山から浦上方面をのぞむ

茶飯事でした。飯場には風呂もなく、夜は二十畳ほどの部屋に二十人がひしめき合って寝ていました。食事といえは豆と麦ばかりの粗末なもので、量もとうてい足りません。最初に豆かすだらけのご飯を見た瞬間には、「これでは生きていく自信がない。おれはもう死ぬんだ」と思いました。

ただ昼は働いて夜は寝るだけのそんな日々の中で、一緒に働いていた仲間たちの多くが病気になるていきました。また逃げ出そうとして捕まり、棒でひどく叩かれる者をもたくさん目撃しました。幾度となく心の中で「たぶん生きては帰れない」と覚悟しました。

## 被爆

八月九日はとてもいい天気でした。

いったん出された警戒警報が少しして解除になったので、作業を始めようとした時のことです。一機のB29が海岸の山のほうから飛んできました。長崎は山に

囲まれた地形なので、遠くにいる飛行機はなかなかわかりません。気づいた時にはB29は市の上空に達していました。

突然、爆風と燃える火で市内一帯まるで闇のようになりました。その中に太陽が黒煙に遮られ、真っ赤な火の玉のように見えました。あちこちでガスタンクが爆音とともに爆発しました。汽車の線路が縄のようにくるくると丸まり、枕木は火を吹いていました。

爆心地から二・三キロ、トンネルの前にいた私は、爆風に十メートル以上飛ばされ、作業中の道路の下の大きな道へ腰から落ちました。着ていた作業服は一瞬で燃えてしまい、身体からは水のようなものが流れていました。それはやけどから流れ出た体液でした。一緒に働いていた仲間のほとんどが死にました。私は奉仕団の人に担架で運ばれましたが、やがて意識を失ってしまいました。

## 病院

気がつくと、大村海軍病院のベッドに寝かされていました。二十日間も意識不明だったと聞かされました。

被爆したとき、服に覆われていなかった部分に、大やけどを負っていました。ちょうど暑い時期だったので、露出していた部分も大きかったです。そこに黒い薬を塗り、ボロボロになった部分を削り取るという治療が毎日続きました。今もケロイドの跡が残っています。

辛い治療でしたが、それでも私はましなほうでした。建物の窓際にいて被爆し、ガラスの細かい破片が身体中にささった人は、手の施しようがなく、苦しみがから死んでいきました。また、やけどのところは虫が湧き、それで死ぬ人も多かったのです。毎日死んだ人が担架に乗せられて出て行きました。

大村病院には、その年の十二月まで約四か月入院していました。病院の人たちはみな親切でした。しかし、やがて進駐軍が長崎にも入ってくると、海軍病院は閉鎖されることになり、重篤でない患者は追い出されることになりました。病院の人が新聞を持って来て、私に「朝鮮半島はアメリカとソ連に占領されているか

ら帰るな。日本で一緒に暮らそう」と言いましたが、少し歩けるまでに回復していた私は韓国に帰ることにしました。

## 帰国

日本にいる韓国人のために韓国政府が用意した帰国用の船が、博多から出てきました。私は近所の韓国人に車に乗せてもらい、やつとの思いで博多港に着きました。ところが非常に多くの人が帰国の順番を待っていて、どれだけ待たされるかわかりません。私は自分のやけどの状態を係の人に見せ、「このまま待たされると、私はここで死んでしまう。私の死体を処理するのが嫌だったら、早く帰国させる」と詰め寄りました。そのかいあって、翌日には帰国の船に乗ることができました。

やつとの思いで故郷に帰り着きました。おそらく両親は死んでいるだろうと思っていたのですが、幸い健在でした。

帰ったものの、治療のできる病院もなければ、食べるものもろくにありません。日本が植民地として韓国から搾取していた影響が残り、あらゆるものが不足していました。私はその辺りに生えている草などを採って、おかゆのようなものを作って食べ、あとはただ寝ていました。

両親はそんな私の姿を見るにつけ、日本への恨みを募らせ、「日本なんか滅んでしまえ」といつも口にしていました。そこには、頼りにしていた長男を奪われた怒りもあったと思います。私の心の中も、日本への憎しみでいっぱいでした。そうした生活は四年間も続きました。

## 信仰

寝たり起きたりの生活の中で、私は自分が生きていることの意味を考えました。死んでいたはずの私が、こうして奇跡的に生き延びているのは、自分の力ではない。神様の不思議だ。もう私のいのちではない。私を火の中から救い出してく

ださった神がおられるのだ。その方を信じて生きていこう。

ちょうど近所にキリスト教会に出席している方がおられたので、その方に教会に連れて行ってもらいました。そして自分を救い出してくださいと神様、イエス・キリストを受け入れ、まことの神を信じるクリスチャンになりました。

その後、自分で教会を建て上げる恵みも与えられました。それが現在私が所属している花山浸礼教会です。

## 結婚

寝たきりの生活からはようやく解放されたものの、被爆の際に腰を強打して背骨が曲がり、それが神経を圧迫していたので、腰がちぎれるように痛み、長くは立っていられませんでした。当然、農業も十分にはできません。生活は苦しく、家人が病気になっても医者にかかることもできませんでした。

そんな状況ではありましたが、少ししてから知人の紹介で結婚することになり

ました。

しかしその当時、被爆者とわかれば結婚できませんでした。「障がいをもった子が生まれる」「死産する」などと言われていたからです。ですから自分が被爆者であることを隠したまま結婚しました。

妻はクリスチャンではありませんでしたが、結婚後、信仰をもつようになりま

した。やがて妻は身ごもり、長男を出産しました。しかし聞いていたとおり、そして恐れていたとおり、死産でした。原爆の恐ろしさを改めて感じました。妻はその時まで、私が被爆者だとは知りませんでした。

その後、幸いなことに、二人の息子と三人の娘を授かりました。全員が健常で、今では孫も十一人います。神様はあふれるばかりの恵みをもって、私を豊かに祝福してくださいました。

半世紀連れ添った妻は、六年間の寝たきり生活を経て、今年（二〇〇五年）一月に天に召されていきました。やがて天国で再会するとはいえ、妻のことを思う

と、今も涙があふれてきます。苦勞をかけましたから……。

## 日本との架け橋

一九九〇年、長崎の被爆者救済団体の平野伸人氏一行が訪韓された際、ソウルで彼らと会うことができました。そして平野さんらの招きで、翌年六月に長崎を訪れ、三か月間の入院治療を受けることができました。そのとき、病院を訪問してくれたアメリカ人宣教師の紹介で長崎の教会の牧師先生とも出会い、その先生の教会と韓国の私の教会が姉妹関係を結んで交流するようになりました。その交流は現在も続いています。

さらに一九九五年に長崎を訪問した時には、長崎放送のテレビ取材を受け、その模様は二度も放送されました。その後、一九九八年一月には長崎友愛病院に二か月、二〇〇三年十月には長崎大医学部病院に三週間、入院しました。その際も、多くの人たちと交流を深め、放送局や新聞社の人など、知り合いもずいぶん増え

ました。そして今回（二〇〇五年二月三月）は一か月あまり、大阪の阪南中央病院で治療を受けることができました。

私は渡日治療に来る際も、日本の人たちと交流することを何より願って、やって来ます。そんな私の姿を見て、ある人が私に言いました。「金さんは韓国と日本の架け橋ですね」と。

日本と韓国は今、近くても遠い国です。過去の歴史が国民感情に影を落としています。それを乗り越えるには、両国の人たちが、もつと出会って、話をしたりすることが必要です。互いに交流し、互いに理解し合えるようになることを願ってやみません。

日本は私に、そして私たち韓国人に、本当にひどいことをしました。でも、まことの神様を信じるクリスチャンとなった私は、日本のすべてを赦しました。もう恨みはありません。憎しみもありません。今では長崎を自分の第二の故郷だとさえ思っています。

## 在韓被爆者・在外被爆者のために

三年前の統計によると、韓国には広島・長崎の被爆者が約二千人います。しかし、そのうち被爆者手帳が交付されていない人が八百人ほどいます。というのも、被爆者手帳の交付を受けるには、日本へ来て手続きをしなければならぬことになってからです。また、被爆者手帳を取って健康管理手当がもらえるようになって、その支給期間は五年間で、期限が過ぎればまた日本に来て更新しなければなりません。

これでは病気で弱っている人や高齢の人など、ほんとうに必要な人が援助を受けられません。多くの被爆者にとって、今の制度は、絵に描いた餅にすぎないのです。

日本政府は直ちに在外被爆者への援護政策を改定すべきです。審査が必要なら、日本の医者韓国へ派遣して調べればよいではありませんか。在外被爆者が、渡

日しなくても被爆者手帳の交付を受け、健康管理手当を受給できるようになることを熱望します。

二〇〇三年十月に長崎大で治療を受けたとき、この問題に関する請願書を長崎市長に送りました。そのとき、市役所の担当の方が私のところに来て、「これは長崎の被爆者の思いと同じです。韓国の被爆者の皆さんと、長崎・広島の人たちが一緒に、日本政府に訴えかけて、実現できるようにしましょう」と言ってくれました。今回も市民団体を通して、大阪府知事に請願書を届けました。

## 被爆六十年を迎えて

歴史が始まって以来、この世に戦争が絶えたことはないと言われます。戦争がもたらしたものはなんでしょう。貴重な人命が犠牲にされるばかりでなく、たくさんのものが焼失し、人間の暮らしを困窮に陥れています。

恐るべき武器を開発した人も、その恐ろしさを知りながら使用した人たちも、

犯罪に問われることはないかもしれませんが。そして今日も軍事研究が世界のあちこちで進められています。

六十年前に核兵器が使用された責任は、まず戦争を起こした日本が負うべきです。日本政府は、国民の好まない戦争を起こして自国民の恨みを買ひ、また世界各国からの非難を受けました。まず日本が悔い改めるべきです。

もし人間が核を間違った方法で使うなら、強大国も弱小国も全滅してしまいます。神が人間に核を与えられたのは、人間の暮らしを助け、豊かにする道具として使うためです。戦争や殺人や世界滅亡の道具として与えられたわけではありません。神はみこころに逆らうことを、絶対許されません。

アメリカやイギリスなどの強大国なら核保有を認められるというのも、おかしい話です。彼らは決して自分たちの核兵器を手放そうとはしません、まず強大国が核を放棄すべきだと思います。

日本の人たちも戦争は嫌でしょう。戦争を好む国民はないですから。しかし日本も軍事拡張していると聞きました。政府がそうするなら、国民が世論を興して

「戦争はダメ。核はダメ」と声をあげるべきです。

日本国民の皆さん、核廃絶運動に参加しましょう。私たちが在外被爆者も心を合わせて、ともにこの運動にあずかりたいと思います。

(韓国・花山浸礼教会会員)